（調査概報）

習志野市　花咲貝塚発掘調査概報

習志野市教育委員会
堀部昭夫

Ⅰ　遺跡の位置

花咲貝塚は千葉県習志野市花咲２丁目の台地に所在する。東京湾から千葉市幕張町を経て習志野市屋敷町にかけて大きな沖積地が浜田川、屋敷川によって開析されているが、この沖積地は屋敷町２丁目地先で２つの支谷に分岐し、その左支谷は市民会館の下に谷頭が求められる。

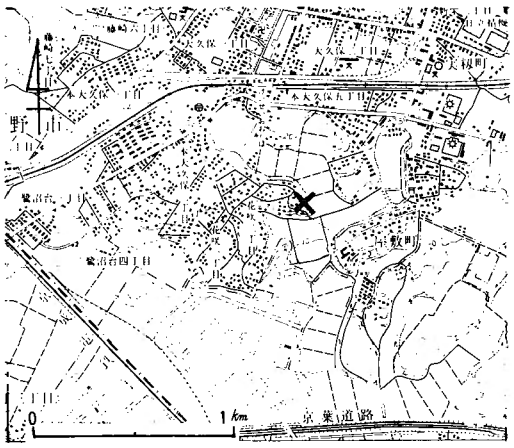
貝塚は、沖積地にほぼ東方向に向って張り出した小舌状台地の傾斜面に形成されている。この貝塚の位置まで現東京湾の汀線から直線距離にして約6.2ｋｍを数える。貝塚のある花咲町一帯はかつては田園地帯であったが、京成大久保駅から約１ｋｍという便利さのため、近年急激に開発がすすみ宅地化が進行している地域である。貝塚発見の発端となったのは貝塚が形成されている傾斜面を利用した宅地造成工事のため、台地下の幅３ｍ程の市道に沿って高さ５ｍのコンクリート土留壁を構築するため斜面の一部を掻削したことにより貝層の一部が露出したものである。

宅地工事の施主である宮城氏の同道を得て現地の確認をした際、同じ地続きの斜面の宅造工事の際にも横巾20～30ｍにわたって貝がたくさん発見されたことがわかり、貝塚は傾斜面にそって約40ｍ程の広がりがあったことが推定された。

現地確認の結果、発見された貝層は、貝塚の一番端の部分に当るところで、工事の進行状態から５日間にわたって発掘調査を行うことになった。

Ⅱ　調査の経過と層序

貝塚の調査はすでに宅地造成の基礎工事がすすめられていた関係で、調査可能面積はきわめて狭く、東西６ｍ、東壁側5.9ｍ、西壁側３ｍの変形にならざるを得なかった。発掘区における層序は、黒色でやや砂質の表土層、僅かながらスコリアを



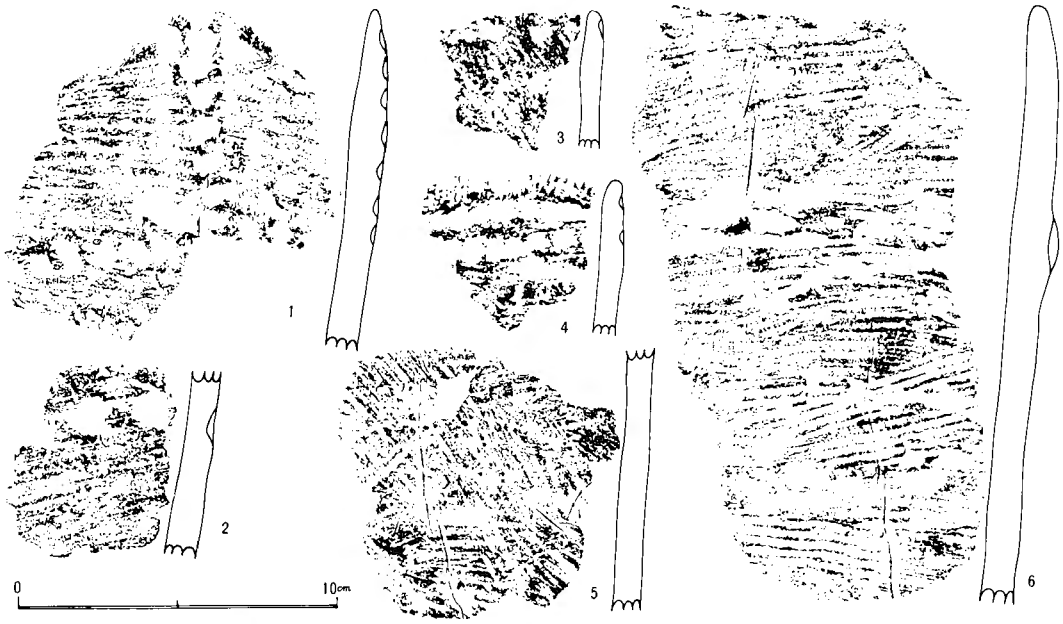
第１図　花咲貝塚の位置図

含む黒褐色の第２層、平均30ｃｍを有する第３層の褐色土層、更に黒褐色の第４層、そして平均10ｃｍほどのローム漸移層と続き、北壁面においては地表下1.6ｍで第６層のローム層に達する。そしてこの６層の堆積層の中間に、ハイガイ、ハマグリ、カキなどの純貝層がレンズ状にあるいはブロック状に混在している。

第１層はかなりの厚味をもった土層であるが遺物は全く検出されていない。また、スコリアを含む第２層からは条痕文土器の細片が僅かながら検出された。黒褐色を呈する第４層は本貝塚の主要包含層ともいえる土層で、条痕を有する繊維土器が検出されている。第５層はローム漸移層であるが貝塚の最下部から発見された竪穴住居はこの面から掘り込まれ、ローム層に達している。遺物の検出は全く認められない。

貝層はこれらの土層の中間にレンズ状にあるいはブロック状にみられるが、いずれも純貝層の状況で、西壁側における観察ではマガキ及びハイガイが半々の純貝層の中にはハマグリが僅かながら混入していたが、いずれも小型であった。

Ⅲ　出土遺物の概要



第２図　花咲貝塚出土の縄文土器拓影(早期末)

今回の調査は宅地造成工事が進行していた関係で調査範囲が狭ったことにより、出土した遺物の量、種類は多くなかった。

（1）　自然遺物

1 軟体動物

腹足類　アカニシ、ツメタガイ

斧足類　ハマグリ、カキ、ハイガイ、オキシジミ、カガミガイ、シオフキ、サルボウ

2 脊椎動物

哺乳類　ニホンジカ、イノシシ

花咲貝塚から検出された自然遺物は以上のとおり、軟体動物が９種類、脊椎動物が２種類の合計11種類であった。軟体動物のなかで、腹足類が少なく、これに対して斧足類のハマグリ、ハイガイ、オキシジミ類の非常に多いのが注目された。特にハマグリは成育状況が良く、K65、L90といった大計のものが多く、またこのような傾向はカキにおいても同様であった。このようなことから、貝塚形成期の自然状態が貝類の成育に非常に適したものであったことが推察される。

また、哺乳類は僅かに２種類しか検出できなかったが、シカとイノシシのどちらが多いか検出数量があまりにも少ないため判断はむずかしい。

（2）　人工遺物

1　土器

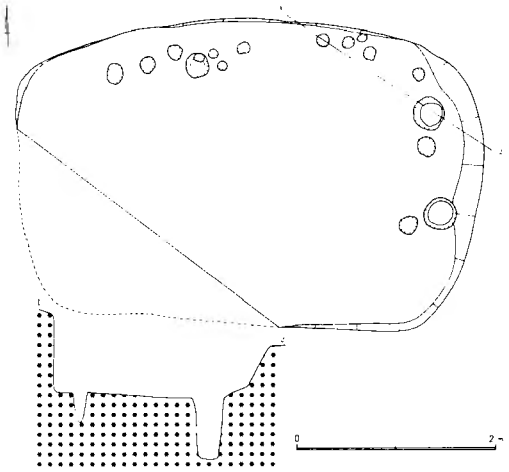
本貝塚から検出された土器片は数量的にはきわめて少ない。また傾斜面に形成された貝塚であることから出土遺物の層位的把握が困難であり、貝塚の全体的構成年代を推定するうえで障害となった。土器はすべて破片として検出され、個体として形状を復原し得るものはない。

発見された土器片は、いずれも胎土中に多量の繊維を含むもので、胎土も比較的精製されたものが使われている。有文のものと無文のものとがあり、半載竹管による連続刺突文や三角状刻目文が中心であり、なかには口唇部にヘラ状工具による刻目が施されているものもみられる。器壁は平均１cm内外で、有文の土器の胎土は無文のものに比べてより精製されているようである。全体的に焼成は良いが、無文土器がやや有文のものよりもろい感じがする。器面の整形はヘラ状工具と貝殻背部によって行われている。

2 石製品

本貝塚から発見された石製品はその数量および種類ともきわめて少なく、石鏃が１点と磨石および凹石が各1点、さらに自然礫が数個という状況であった。石鏃は１辺が約1.6cmの正三角形に近い無茎のもので一部に自然面をのこす薄い剝片を用いて入念に加工を施している。石材はサヌカイト。

磨石は扁平な河原石を用いたもので、10.6cm ×



第 3図　花咲貝塚発見の住居址測量図

7 cmの小判形を呈し、厚さは約 3 cmである。表裏とも入念な研磨が施されていて、さらに左右の縁辺部も定角式磨製石斧の如き明らかな研磨がみられる。凹石はその中央部が表裏とも直径約 2 cmぐらいの円形に打撃痕がみとめられ、その部分は若干ながら凹んでいる。石は安山岩を用いたもので、長径7.1cm、短径 6.5cm、厚さ 4.6cmを数える。

発見された石製品は以上のとおりであるが、元来石器の原材料が絶対的に乏しい本貝塚においては多量の石製品の出土は期待できず、まして調査区域の狭小さを考えあわせるとこの程度の出土もうなずけるところである。

IV、 出土遺構

(1) 住居址

本貝塚の調査に際して、住居址或いはその他の遺構が存在するであろうとの予測はあったが、仮に存在するとすれば、貝塚のある傾斜面より上部の台地縁辺部近くであろうと想定していた。調査の終了が目前に迫ってからソフトローム層に落ち込みが確認された。この落込みが発見された層位は現水田面との比高わずか 1 m であった。

住居址の調査は、全形の把握が行われ、工事の関係で全体の約 4 分の 1 が未調査区域として残ったが、ほぼ全体を推測し得るところまで進めることができた。住居址は長径約4.6m、短径約3.1mの隅丸方形に近い形状である。床面は東南のコーナー部分を除いてほぼ全面がよく固められた貼り床状を呈し、床全体の厚さは2〜3cmであった。床面の傾斜はなく、柱穴と思われる大小のピットも16ケ所検出されている。しかし、その大部分は東壁および北壁にそったところにあり、南壁、西壁にそった部分からは検出されなかった。

柱穴の中で最大径（床面レベル）を計るものは P_1及び P_2で、いずれも径35cmを数える。また、このP_1、P_2 はいずれも深さは40〜45cmを計測した。P_3は径28cm、深さ18cmを数えた。このP_1 〜P_3 をのぞいたその他のピットは、いずれも径10数cmで深さも5〜10cm程度のものばかりである。

本住居址は北側から南側に急傾するローム層中に掘り込まれているため、北壁側の壁高は80cmを東壁部で45cm を数えるが、南壁部では僅か 7 cmの壁高しかない。

住居址内部からは、炉址、炉穴その他の遺構は発見されなかった。更に住居址内には暗褐色の土層が流入していたが、この層からの遺物の出土は全くなかった。この住居址は前述のようにソフトローム層から掘り込みがなされ、花咲貝塚の遺物包含層より下層から発見された。このことは、本住居址が花咲貝塚の形成期より古い時期に存在したことを示しており、花咲貝塚とは直接的な関係のないものと考えざるを得ない。住居址内部からは形成時期を決定し得る資料は発見されていない。

結び

花咲貝塚の調査に関する概要は以上のとおりであるが、これまでも記したように宅地造成工事に伴って発見された貝塚の調査であっただけに、調査可能区域の狭小さが貝塚の性格を全体的に把握することを困難にした。しかも貝塚の形成が傾斜面であったことも堆積層と出土遺物の関係をより複雑にしていたことも一因としてあげられる。いずれにしても僅かではあったが出土した遺物から本貝塚の形成期を考えると、縄文早期末の条痕文系土器群が盛行した時期に相当するであろう。

今回の調査によって発見された竪穴住居址は前述の如く、本貝塚における遺物包含層より下層から検出されたものであり、花咲貝塚の形成期より時期的に古いものであることは明らかであるが、住居址に伴うと思われる遺物の検出が全くなく、その時期を明確にし得ないことは残念であり、今後の類例の増加を待って検討課題としたい。